仙台市文化財パンフレット　第82集

発掘現場から文化力
POWER OF CULTURE

わくわくっ！埋蔵文化財

文化財×つながる

仙台市教育委員会

はじめに

『文化財』という言葉から、何を連想されるでしょうか。

『発掘調査』『縄文土器や弥生土器』『歴史を紐解くための宝』など、個々人のイメージがあると思いますが、私たちは『大切な文化的財産を守る』『子や孫など、次の世代に伝える』など、『保存・活用』の観点からも文化財を捉えていただきたいと感じております。

日常生活において、土器や石器などの文化財に触れる機会の少なさから、文化財を遠い存在に感じている方も多いと思います。しかし、仙台市内には780を越える遺跡が存在するように、文化財は実は身近にたくさんあり、その多くが現代を生きる私たちの生活や文化などと密接に関わっています。

本パンフレットでは『文化財×つながる』をテーマに掲げ、地域や文化、道具の変遷など多くのつながりについて記載しました。文化財を守り、伝えていく重要性や必要性を、より身近に、より自分事として捉えて頂ける内容となっております。ご覧いただいた皆様が、文化財との距離を縮め、文化財に親しむきっかけとなれば幸いです。

仙台から見る縄文文化の広がり

縄文時代の終わりを飾る土器が亀ヶ岡式土器です。繊細な文様が特徴で、縄文文化の最高到達点と位置付けても過言ではありません。仙台市内では大野田遺跡や赤生津遺跡などから出土していますが、東北地方を中心に北海道や高知県でも出土例があり、広い範囲での交流が行われていたと考えられます。

また、縄文時代には、土器や石器などの実用的な道具だけではなく、非実用的なものも多く作られていました。その代表例が土偶で、まじないや祈りに用いられたと推測される素焼きの人形です。大野田遺跡から出土したハート形の顔をした土偶は関東地方でも出土しており、交流があったものと推測されます。

亀ヶ岡式土器の浅鉢（大野田遺跡出土）

多様な人が関わった古代の役所・寺院

郡山遺跡の出土遺物には、仙台周辺で一般的に見られる土師器の他に、関東地方の土師器と類似したものや、当時の都で使われた精緻な粘土で作られた畿内産土師器も含まれています。このことから、地元の人だけでなく、関東地方から移り住んだ人や、都から派遣されてきた役人など、多様な人びとが役所の造営に関わっていたと推測されます。

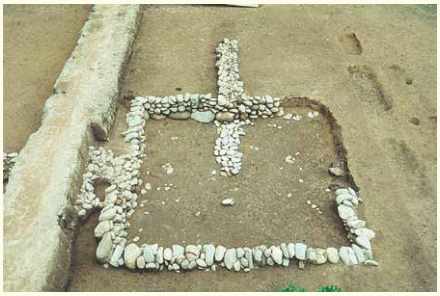
陸奥国分寺跡で出土した瓦には、刻印(スタンプ)が押されたものや、文字がかかれたものがあり、瓦造りを注文した地域名・人名、瓦造りをした人々や窯の場所などを表していると考えられます。刻印の中には当時の陸奥国の郡名を示すと考えられているものもあり、陸奥国各地の協力を得て国分寺の造営が行われていたことがうかがえます。

土師器（郡山遺跡出土）
（中上：畿内産土師器、左: 関東地方と類似した土師器、右：東北地方の土師器）

瓦に押された文字刻印（陸奥国分寺跡出土）
（左上より時計回りに「物」、「伊」、「大」、「矢」）

【郡山遺跡】（太白区郡山）

郡山遺跡は、発掘調査の結果、多賀城以前の陸奥国府（律令国家が陸奥国を治めるために設置した役所）であることがわかっています。この役所には、全国的にもめずらしい石組池が造られており、律令国家の役人と東北地方の蝦夷が、池を使って儀式をしたと推測されています。



発掘調査で発見された石組池（郡山遺跡）

【陸奥国分寺跡】（若林区木ノ下）

陸奥国分寺跡は、奈良時代に各国に造られた寺院で、七重塔・南大門・中門・金堂（仏像を安置した建物）・講堂（僧侶が読経や教義を学ぶ建物）・僧房（僧侶が日常生活をおくった建物）などの建物からなる大規模な寺院であったことがわかっています。

鎌倉武士の陶磁器

王ノ壇遺跡は、鎌倉時代に仙台市南側を支配していた鎌倉武士の拠点と考えられている場所です。発掘調査では大規模な館跡とともに、そこで使用されたたくさんの陶磁器が見つかりました。東海地方産の陶器をはじめ、鎌倉市（神奈川県）内で見つかっているものと同形の火鉢や、当時高級品であった中国産の器なども含まれていました。

常滑産の三筋壺（王ノ檀遺跡出土）

中国産の緑釉陶器
（王ノ檀遺跡出土）

これらの陶磁器は、鎌倉武士により持ち込まれたものや、商人により運ばれたことが想定され、鎌倉時代の交通と海外貿易の発達といった様子をこれらの出土品から垣間見ることができます。

時代区分			年　代	日本の主なできごと	仙台周辺の主なできごと
原始	旧石器		約30000年前 約20000年前		市内で人が活動し始めた可能性がある（上ノ原山遺跡） 石器製作跡（山田上ノ台遺跡）、キャンプ跡（富沢遺跡）が残される
	縄文	草創期 早期 前期 中期 後期 晩期	約16000年前	土器の製作・使用が始まる 土器の文様として縄文が定着する 大きなムラがあらわれる ハート形土偶がつくられる 大陸から稲作文化が伝わる	石器の貯蔵が行われる（野川遺跡） 平野部にもムラが営まれる（六反田遺跡など） 大規模なムラがあらわれる（上野遺跡・高柳遺跡・山田上ノ台遺跡など） 配石遺構がつくられる（下ノ内浦遺跡・大野田遺跡）
	弥生	前期 中期 後期	BC300年頃	各地に小国ができる 邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送る（239）	東北地方で稲作が始まる 仙台平野で稲作が行われる（中在家南遺跡・高田B遺跡など）
古代	古墳	前期 中期 後期	AD300年頃 400年頃 500年頃	大陸から須恵器生産などの先進技術が伝わる 仏教が伝わる（538）	方形周溝墓がつくられる（戸ノ内遺跡・安久東遺跡） 大型の前方後円墳がつくられる（遠見塚古墳） 須恵器の生産が行われる（大蓮寺窯跡）
	飛鳥	終末期（古墳時代）	600年頃 645年 694年	聖徳太子が十七条の憲法を定める 大化の改新 藤原京へ都が移る	このころ陸奥国がおかれる 郡山遺跡Ⅰ期官衙が造営される（7世紀中頃） 郡山遺跡Ⅱ期官衙と附属寺院が造営される（7世紀末頃）
	奈良		710年 724年 741年	平城京へ都が移る 聖武天皇が各地に国分寺を建てさせる	多賀城が築かれる 陸奥国分寺・陸奥国分尼寺が造営される
	平安		794年 869年	平安京へ都が移る	陸奥国大地震　復興のための瓦が焼かれる（台原・小田原窯跡群）
中世	鎌倉		1192年	源頼朝が征夷大将軍となる	伊沢（留守）氏が陸奥国に赴任する 岩切で定期的に市が開かれる（13世紀頃）
	南北朝		1334年	建武の新政 南朝と北朝に分かれて対立する	
	室町（戦国）		1338年 1467年	足利尊氏が征夷大将軍となる 南朝と北朝が一つになる 応仁の乱がおこる	岩切城周辺で戦いがおこる（14世紀中頃） 市内各地に多くの城館がつくられる
近世	安土桃山		1573年 1590年 1600年	織田信長が室町幕府を滅ぼす 豊臣秀吉が全国を統一する	伊達氏が仙台周辺を支配下に置く 伊達政宗が仙台城をつくり始める
	江戸		1603年 1628年 1638年	徳川家康が征夷大将軍となる	伊達政宗がヨーロッパに使い（支倉常長）を派遣する 伊達政宗が若林城を造営 伊達忠宗が仙台城二の丸造営に着手
近代	明治		1868年	戊辰戦争が始まる	

“伊達”な文化と舶来品

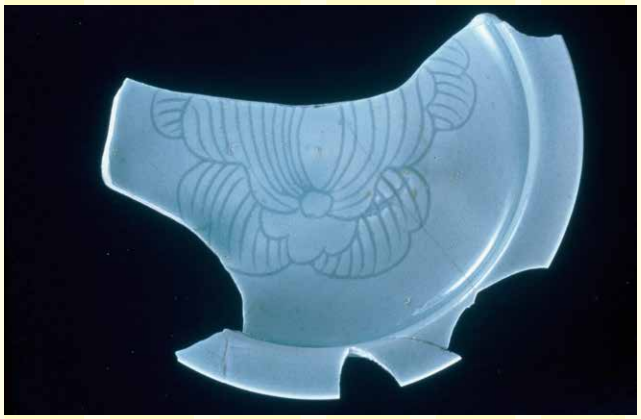
仙台城を築いた伊達政宗は、伝統的な文化を大切にしながら外国の文化も取り入れ、新しい“伊達”な文化を育みました。このことは、仙台城跡の発掘調査で出土した遺物から読み取ることができます。

仙台城跡では、これまで多くの発掘調査が行われており、かつて本丸にあった大広間や登城路に建てられた門の屋根を飾った瓦、生活を彩った陶磁器が数多く出土しています。

ヨーロッパ産のガラス器（仙台城跡出土）

陶磁器では、国内産の織部焼（岐阜県）や波佐見焼（長崎県）など、国内の他地域との交流を示すものだけでなく、外国との交流がうかがえるものも数多く見つかっています。

特に、平成9年度～15年度に行われた本丸北壁石垣修復工事に伴う発掘調査では、中国産の青花や青磁、17世紀のヴェネチア産のガラス器など、“舶来”のものが多く出土しました。その中でも、エナメルで彩色されたガラス器の破片は、国内ではまれな出土例です。これらのガラス器は当時の南蛮貿易、もしくは、仙台を訪れた宣教師などの外国使節がもたらしたものと推定されています。こうした舶来品の数々は、外国とのつながりを示す貴重な文化財です。



波佐見焼の折縁皿（仙台城跡出土）

エナメルで彩色されたガラス器（仙台城跡出土）

【仙台城跡】（青葉区川内）
仙台城跡は、青葉山とその麓に築かれた日本の近世を代表する城跡です。伊達政宗によって慶長6（1601）年より築城が開始され、以後幕末まで仙台藩主の居城として藩政の中心にありました。

農具のいまむかし

弥生時代には稲作を中心とした農耕社会が成立します。仙台市でも太白区の富沢遺跡、若林区の高田B遺跡、沓形遺跡、中在家南遺跡などで弥生時代の水田跡が発見され、農具も出土しています。

弥生時代では、鋤や鍬などの木製農具や石包丁などの石器が使われていました。鋤は土を掘り起こすための道具で、現代のスコップのような形をしています。鍬も現代と形状は変わらず、土を耕すために使われました。石包丁は稲の穂先を刈り取るための道具です。

古墳時代以降は、石器に代わり鉄器が使われるようになります。稲を刈り取る道具としては鎌が使われ、鋤や鍬の刃先にも鉄が使われるようになります。

農具は技術の進歩とともに改良が加えられ、より便利になっていきますが、鋤や鍬のように現代まで基本的な形状が変わらないものもあります。

弥生時代の水田跡（沓形遺跡）

弥生時代の木製農具の出土状況（中在家南遺跡）

弥生時代の鍬（中在家南遺跡出土）

古墳時代の鋤（高田 B 遺跡出土）

炊く？蒸す？お米の調理方法

私たちの食生活に欠かせないお米。今は炊飯器が使われていますが、昔はどのようにして調理していたのでしょうか？

中在家南遺跡から出土した弥生土器の甕をよく見ると、内側には米が焦げ付いた痕が、外側にはお湯が吹きこぼれた痕が確認できます。このように、稲作が広まった弥生時代では、土器の甕を使い、お米を水に漬けて加熱し“炊く”あるいは“煮て”食べていました。その後、古墳時代中頃以降にカマドと甑が登場すると、湯気を通して加熱する“蒸す”という調理法が取り入れられるようになったとされます。

弥生時代の甕（中在家南遺跡出土）

土手内遺跡からは、昔の人々が食事を作る際に使ったとみられる甑が複数出土しています。甑とは、食べ物を“蒸す”際に使われた土器で、現在の蒸籠と同じ役割を果たしていました。底面に１つないし複数の穴があいた深鉢形の土器に布を敷き、その上に米などを入れて使われました。甑は弥生時代から盛んに使われ、古墳時代には日用雑器として大量に生産されました。当初の甑は土製でしたが、のちに木製の甑が登場し、現在の蒸籠につながります。

古墳時代の甑（土手内遺跡出土）

近世以降になると鉄製の羽釜でお米を“炊く”という調理法が一般化し、昭和にはガスや電気でお米を“炊く”炊飯器が広く使われるようになりました。お米の調理方法は、道具とともに時代によって変化しながら、今につながっています。

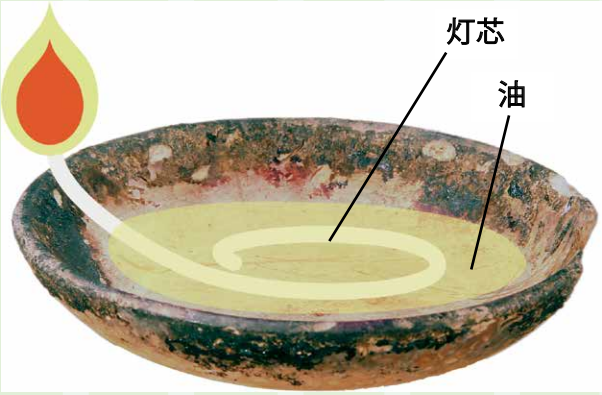
お米の調理方法の変遷

食器から照明具へ

周囲を照らす照明具として、奈良時代から江戸時代にかけて灯明皿が使用されました。灯明皿として使われる素焼きの小皿（かわらけ）は、もともとは食器として、今の宴会における紙皿や紙コップのような使い捨ての器として使われていたと考えられています。

照明具としては、小皿の内部に植物性油もしくは動物性油を入れ、灯芯を立て掛けて火を灯して使います。出土した小皿には、内外面に油や煤の付着物が確認できます。

江戸時代になると、陶器の灯芯置き（ひょうそく）の付いた灯明皿も登場します。なかには取手が付いたものも誕生し、今のランタンや懐中電灯に近い道具へとつながっていきます。



灯明皿の使用方法

むかしもいまも使用される文房具

鉛筆や消しゴム、ノートなどは、学校や仕事で誰もが使う文房具です。瑞鳳殿（経ヶ峯伊達家墓所）の伊達政宗の墓には、さまざまな筆や雄勝石製の硯に加え、それらを収めた筆箱など数多くの文房具が収められていました。その中には、出土品では日本最古の鉛筆も含まれています。

また、今では簡単に買える紙ですが、昔は紙が大変貴重でした。そのため古代においては「木簡」と呼ばれる木札も紙の代わりに使用されました。そして木簡の字を消す際には「刀子」と呼ばれる小刀が使われました。古代の硯は陶器で作られており、主に官衙（役所）から出土します。「円面硯」や「風字硯」などの種類があり、写真の円面硯のように装飾が施されたものも出土していますが、現在同様「陸」と呼ばれる高い部分で墨を磨って使いました。

古代の中国では、役人は「刀筆之吏」とも呼ばれていましたが、それは彼らの仕事道具であるこれらの文房具に由来しています。古代の役人たちが実際に使用したこれらの文房具からは、彼らの仕事ぶりをしのぶことができます。

円面硯・刀子・木簡（郡山遺跡出土）

発行　仙台市教育委員会文化財課　仙台市青葉区上杉一丁目5-12　発行日　令和5年11月